

## 仙台市の都市機能の変化

——仙台駅東口を中心として——

蓑田由佳

仙台市は、宮城県の中央東部、太平洋に面して位置する都市である。

緯度のわりに穏やかな気候や、自然に恵まれ落ち着いた風土などにより、古来『杜の都』と呼ばれ、また政治・文化その他の東北における一大中心地であり続けてきた。

もっとも仙台市の中心性は、東北地方各県でそれぞれまとまりがちな諸活動を、徹底的に広域ブロックレベルで把握するまでには至っておらず、首都圏の出先機関のベースキャンプ的役割を果たしている（支店経済）観がある。

人口は70万248人（昭和60年）、市域にドーナツ化現象が見られるが、周辺都市圏を含めて100万人に達する。

産業構成については、7割以上を第3次産業が占め、なかでも卸売業のウェイトの大きさは特徴的である。

昭和57年から60年にかけて、盛岡～大宮～上野と東北新幹線の乗り入れが実現し、仙台～上野間は約2時間の一日行動圏となった。

しかしそれによって、市場の拡大や情報量増加などのメリットのみならず、競争激化、顧客の流出、中央資本の圧迫などのデメリットも顕われ、仙台市は一層、高次の中枢管理都市へと成長する必要に迫られた。

東北新幹線の開業にあわせて、仙台市の都市基

盤整備は以前から進められていたが、都市機能をさらに十全に集積し、名実ともに広域ブロックの中核とならねば、仙台市は他の新幹線停車都市と相対して地位が低下し、また首都圏に吸収されて支店経済から脱することができなくなると思われる。

都市機能を向上させるための仙台市の開発プランは、

- 高次交通体系確立
- 都心部拡大・再開発
- サブ・コア設置による多核的開発
- 地域産業の振興
- 国際化

などに大別される。

このうち、将来の都心の一翼を担う地区として、現在土地地区画整理・再開発事業が施工されている仙台駅東第一地区は、仙台港へ至る流通生産業務地帯へ直結する重要な位置を占めてもいるのであるが、その地区開発計画～整備された交通環境、職住近接・立体的集約的な土地利用、機能的な生活ゾーン配置～等に、仙台市の指向する将来像の一端がうかがえる。

現在は、仙台市がさらに高次の中枢管理都市へと変化してゆく過渡期であり、それが完了した後は、首都圏機能分散の受け皿としても、全国的な地位が浮上するであろうと思われる。

## 高岡市の工業

室谷三千世

富山県は呉羽丘陵により二分され、東を呉東、西を呉西と呼称される。高岡は呉西の中心であり、かつては富山市に匹敵するほどの勢力を持っていた。近年、人口の社会動態における流出者数が増加しており、人口は富山の31万2千人に対し

て、17万7千人（昭和60年）に止まっている。両市の通勤、通学圏を比較した場合も、富山市へは35市町村中20が含まれ、高岡市へは12市町村でしかない。つまり、富山市の影響はより広範に及び、しかも高い比率を示しているのに対し、高岡